

ノリッジ訪問記

河 野 豊

ロンドンのリヴァプール・ストリート駅からノリッジ行きの列車に乗ったのは、12月24日の朝のことだった。ロンドンは前日まで重苦しい灰色の雲が垂れ込め、気温も低く、時々小雨も降っていたのだが、クリスマス・イヴのその日は青空が広がる快晴で、まさにエクスカッションに打ってつけの日だった。

ほとんど誰も乗っていない車両で、ぼんやりと外の景色が流れていくのを眺める。列車がロンドン市内を出てしばらくすると、目の覚めるような緑の芝生が線路の両側に延々と続いている。冬でも枯れない西洋芝がどこまでも広がっている。それを見ながら自宅の庭にも植えたいものなどと取りとめもないことを考える。

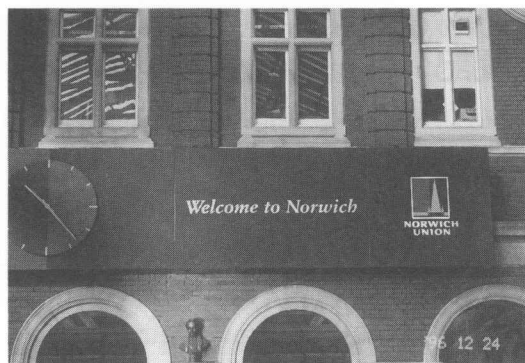
途中、車掌が検札に来る。黒人のその車掌の言葉はなまっていて、“May I see your ticket, please?”の“May”を“My”のように発音する。でもこうして full sentence で話されると理解可能だが、なまった上に、省略されるとわからないことが多い。その度に聞き返すことになる。hearing は難しい。

そもそもノリッジに行こうと思いついたのは、私の研究対象のトマス・ブラウン (Sir Thomas Browne, 1605-1682) が30代前半から死ぬまで過ごした町がノリッジだったからである。ブラウンの時代にはもちろん鉄道などなく、馬車で行き来していた。おそらく3日くらいかかったであろう。それが今ではロンドンから日帰りで行けるようになっている。ノリッジはロンドンの北東約180キロのところにある都市で、

ノーフォーク州の州都である。その歴史は古く、ローマ人がイングランドにいた頃にまで遡る。地理的にヨーロッパ大陸に近いので、貿易の拠点になっていた(大陸までの距離はロンドンまでの距離とほぼ等しい)。Norwich は10世紀には、Northwic と呼ばれていたが、それは「北の村」という意味である(“wic”を「港」の意と取ることもある)。征服王ウィリアム1世の土地台帳(the Domesday Book, 1086)には“Noruic”と書かれている。ノリッジが自治権を持つ“city”になったのは1194年で、獅子心王リチャード1世の特許状による。日本では鎌倉幕府が開かれた頃である。その後、14世紀にヨーロッパで猛威を振った黒死病はノリッジにも伝わり、当時の人口(約6千人)の5分の2の人々が死亡したと推定されている。

中世までにノリッジはイングランド最大の城壁都市になっていて、17世紀までには最大の地方都市になっていた。また15世紀頃までは毛織物工業の中心地となり、大陸からの移住者たちによってもたらされた技術によって、様々な製品が作られていた。

そうこうするうちに列車はノリッジに到着した。午前10時20分。ロンドンから1時間50分であった。青地に白の文字で“Welcome to Norwich”と書かれた掲示板が目に入る。イギリスの鉄道には改札口というものがないので(地下鉄は別だが)、列車からホームに降りるとそのまま駅舎の出口に向かう。周りでは出迎えの人と挨拶を交わす光景がそこかしこで見られる。ノ



ノリッジ駅の掲示板

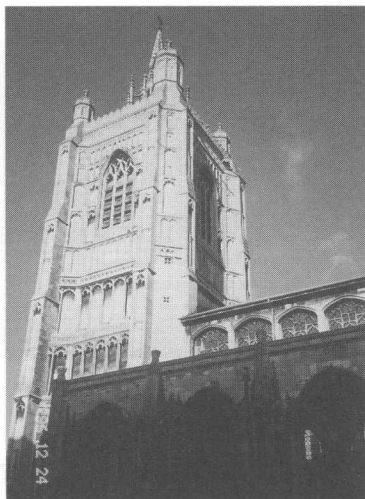
リッジは終着駅なので東京の私鉄のターミナルのように線路がプラットホームの端で終わっている。それを見ると、ああ、ここまで来たんだなという感慨がこみあげてくる。18世紀のイギリスの小説家ローレンス・スターンに『センチメンタル・ジャーニー』という作品があるが、それほどではなくとも、旅というものは人を感傷的にさせるところがある。

駅舎は立派な建物で、外壁には時計がついている。その写真を撮った後、市の中心部に向かう。ウェンサム川に架かる橋を渡って、プリンス・オブ・ウェールズ・ロードという道を歩き出す。橋のそばには“The Compleat Angler”というパブ・レストランがあった。言うまでもなく Izaak Walton の作品にちなんでつけられた名だ。



ノリッジ駅

道はゆるやかな登り坂になっていた。しばらく歩き続けると正面にノリッジ城が見えてきた。12世紀に建てられたその城は現在博物館になっている。城を左手に見ながらなおも歩いていくと右に折れる別の道があってその先は繁華街らしかった。ここまではあまり人は見かけなかったが、さすがにこの辺りは大勢の人で賑わっている。ピザやクレープの屋台には行列ができています。冷たい風が吹いていて肌寒かったので私も何か暖かいものを買おうかと思ったが長い行列を見てやめた。そして何はともあれ観光案内所 (Tourist Information Centre) に行こうと思い、手元の小さな地図で探す。この時はまだその簡単な地図しか持っていなかったもので、場所がよくわからない。市役所を正面に見て、その右手のギルド・ホールの中にあることはわかるが、肝心のギルドホールの位置が不確かである。市役所の前にその付近の案内図があり、それを見ながらギルドホールを探す。しばらく歩き回った後、人に聞いた方が早いと思って、ある中年の婦人に聞くと、親切に教えてくれたのはいいが、言われたとおりに歩いていっても見つからない。仕方がないので繁華街で別の男性にまた聞く。すると市役所の右手にあると言われる。それはわかっているのだけれどと思いつつ、またその方面に向かう。するとようやく見つかった。先ほど見た市役所前の地図上の位置とは全然違うところであった。案内所の看板もごく小さいもので、少し離れると見分けがつかない。やれやれやっと見つかったと思って中に入る。無料の観光マップか何か貰えるかと思って、係りの人に聞いてみるが、あまり詳しいものではなく、繁華街を中心にレストラン、ホテル、駐車場などが載っているだけのものだった。でもそこでは絵葉書やら地図やらノリッジ市のロゴ入りトレーナーやら市の案内ビデオや



セント・ピーター・マンクロフト教会

らが売られていたので、絵葉書と地図とビデオを買って外に出る。



最初に行くのはもちろんブラウンの墓のあるセント・ピーター・マンクロフト教会である。教会はマーケット・プレイスと呼ばれる広場をはさんでギルド・ホールの向かいにあった。15世紀に建てられたその教会はノリッジで最も大きな教会である。そもそもノリッジには数多くの教会がある。道を歩いていると教会にでくわすと言ってもいいくらいである。中世には57の教会があり、現在でも30以上ある。

教会の脇の入り口から入っていくと、牧師が何やら紙を手渡してくれる。見るとこれからこの教会で始まるクリスマス・イブの式典の式次第とクリスマス・キャロルの歌集であった。それでふと教会内を見渡すと大勢の人が席に着いていて、私の後からもぞくぞくと入ってくる。私は何だか場違いな気がして、ブラウンの墓さえ見たら出て行こうと思ひ、先ほどの牧師に墓がどこにあるのか聞いた。次から次へと入ってくる人に式次第と歌集とを手渡すので忙しい牧師に聞くのは悪い気がしたけれども。しかし牧師は親切に教えてくれた。それによると、墓と

言っても碑銘板が教会の柱に埋め込まれているだけで、場所は正面奥の祭壇の右側とのことであつた。写真を撮っていいかと聞くと、あと10分で式が始まるから、それまでだったら構わないと言われたので、写真を撮りに祭壇の方へ行くことにした。そこに行くことは、すでに席に着いている人の前に出ていくことを意味した。何だあの東洋人はというような視線を一瞬感じたが、イギリス人は表面的には他人のことを気にしないようにしているので、私も気にしないことにして前に出て行つた。ざっと見渡したけれど、あと10分と言われてあせっていたせいか、ブラウンの碑銘板は見つからなかった。あまり前にいてもよくないので、脇に行くと、地下室から聖歌隊の少年がぞろぞろと出てきた。地下室には赤い服を着た牧師がいたので、彼にもう一度聞いてみようと思ひ、聖歌隊の少年に下に降りていいかと聞くと、いいと言われたので、降りて行つた。赤い服の牧師は、あるのは知っているけれど、どこかは知らないと言う。そして銅像ならあるのだが、と言って、窓の方を指さした。すると窓の向こうにはまぎれもなくブラウンの銅像が見えた。そういうものがあるとはつゆ知らなかったので私は非常に驚いた。牧師は私についてくるように言い、我々は教会内を探し回つたが、やはり見つからなかった。そうこうするうちに式が始まるとのアナウンスがあつたので、私は出て行こうかと思つたが、せっかくの機会だからと思ひ直し、式に出ることにして、隅の方に座つた。

式はオルガンの演奏で始まつた。教会で実際にオルガンを聞くのは初めてであつた。奏者は先ほどの赤い服を着た牧師で、少年聖歌隊の姿も見える。天井の高い教会内に朗々と響き渡るオルガンの壮麗な調べは、キリスト教徒でなくとも感動的であつた。その後、聖書の朗読や

THE CHURCH OF ST. PETER MANCROFT
CHRISTMAS EVE CAROL SERVICE
For Theatre Royal Staff and Friends and the Cast of
"Jack and the Beanstalk"
at 11.30 a.m.

Welcome and Opening Prayer: Canon David Sharp, Vicar and Theatre Chaplain.
 Carol 5 God rest ye merry Gentlemen
 Reading Isaiah 9 vv 2, 6 & 7. The Prophet foretells the birth of a Saviour - read by an Usher
 A small group of Choriboy's sing carols.
 Reading Letters to God and "Christmas Eve" - read by Nicola Blackman (Fairy Liquid)
 Carol 27 While Shepherds watched their flocks
 Reading Luke 2. 1 - 16. Christ is born in Bethlehem - read by Catriona Macrae-Gibson (Publicity Manager)
 Carol 1 Angels from the realms of Glory
 Reading Letters to Santa Claus - read by Devonald Barritt (Dame Trot) and Karl Howman (Fleshcreep)
 Carol 3 Away in a Manger (children meet at the Crib)
 Reading A Christmas Ghost Story - read by Mark Curry (Simple Simon)
 Carol ?? Your choice of carols on the sheet - a vote will be taken.
 Readings: Christmas Thank yous - read by Mick Gower
 Christmas Gifts - read by Toyah Wilcox (Jack)
 A small group of Choriboy's sing carols.
 Reading Jimmy gives presents too (Richmal Crompton) - read by Peter Wilson (Chief Executive)
 Short Address The Revd. Canon David Sharp, Theatre Chaplain
 Carol 11 Hark, the herald angels sing
 Prayers led by The Revd. Rachel Simper, Theatre Chaplain
 Reading Come on, God!
 Carol 16 O come, all ye faithful
 CHRISTMAS BLESSING
 A HAPPY CHRISTMAS TO YOU ALL
 AND EVERY SUCCESS TO "JACK AND THE BEANSTALK"

THE ACTORS' CHURCH UNION
 is the organisation through which the Church serves and ministers to the entertainment profession, of all denominations or none, through its 200 honorary Chaplains, and its Children's Charity Trust for artists' children. It is also a Fellowship of Christians working in show business, who try to apply their faith in and through their chosen profession. For details of the Actors' Church Union and membership, which is open to all, please ask the Theatre Chaplain. Its headquarters are at St Paul's Church, Covent Garden.

THE ACTORS' CHURCH UNION PRAYER

O God the King of Glory, who in the making of man didst bestow upon him the gift of tears and the sense of joy, and didst implant in his nature the need for recreation of mind and body. Give to those who minister to that need, through drama and music, in the calling of the theatrical profession, a high ideal, a pure intention and the sense of a great responsibility. And both to them, and to those who accept their ministry, give the will so to use it that it may be for the enrichment of human character, and for thy greater glory, through Jesus Christ our Lord. Amen.

INSCRIPTION ON THE TOMBSTONE IN THIS CHURCHYARD OF SOPHIA ANN GODDARD (1772 - 1811) ACTRESS AND DANCER AT THE THEATRE ROYAL, NORWICH.

This Stone is dedicated to the Talents and Virtues of
 SOPHIA ANN GODDARD
 who died March 15th, 1801, aged 25.
 The former shone with superior
 Lustre and Effort
 in the great school of Morals
 THE THEATRE
 while the latter
 Inform'd the private Circle of Life
 with Sentiment, Taste and Manners
 that still live on in the memory of
 Friendship and Affection.

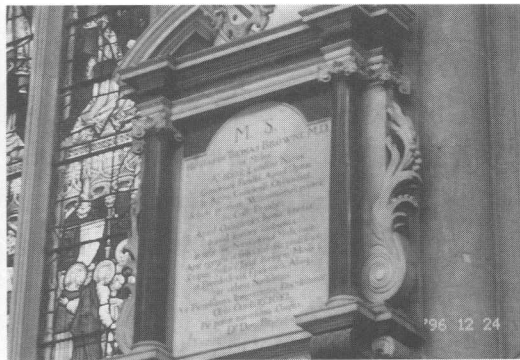
式典の式次第

説教と、クリスマス・キャロルの合唱とが交互に続いた。その合唱はてっきり聖歌隊が全部歌うものだと思っていたが、それは3曲ほどだけで、残りは参拝者も立ち上がって歌うのであった。入り口で歌集を手渡された意味がその時判った。私だけ座っているわけにもいかず、歌うたびに立ち上がったが、どういう曲かは知らないの、歌詞を見ていることしかできなかったのは残念であった。

少年聖歌隊だけの合唱も、日頃から訓練しているのだろう、素晴らしいものだった。それを聞いていると、イギリスの作曲家ベンジャミン・ブリテンの合唱曲『クリスマス・キャロルの祭典』という美しい曲を思い出した。

説教や合唱の間に、教区の子どもたちがサンタクロースに宛てた手紙が読まれたり（その多くは笑いを誘った）、自作の詩や怪談の朗読があったりして、参拝者は結構楽しんでいるようだ

った。そういう光景を見ると、キリスト教は今でも人々の生活にしっかりと根付いているのだと思わざるを得ない。同じようなことは、ロンドンで年老いた浮浪者にタバコをくれと言われてたときにも感じた。その時私は彼にタバコを一本渡して、ライターで火をつけたのだが、彼は丁寧に礼を言い、去り際には何と“God bless you.”と言った。たががタバコ一本でそんなことを言われるとは夢にも思わなかったので非常に驚いた。そういう言葉は本の中では見たことはあったが、実際に面と向かって言われるのは初めてだった。もちろん浮浪者は私が考えるほど大袈裟な表現だとは思っていないのかもしれない。しかしそんな言葉が彼の口からごく自然に出てくるのも、やはりキリスト教のせいなのかと妙な感慨がこみ上げてきたのだった。そして教会内の参拝者の熱心な様子を見るにつけ、彼らと我々との宗教のありかたの差を実感した。



ブラウンの碑銘板

1時間ほどで式が終わったので、私は再びブラウンの碑銘板を探すことにした。最初に言われた所にもう一度行って、さっきよりも丹念に探すと、柱のかなり上の方にあるのが判った。ラテン語で書かれた碑銘板には、この柱の下にブラウンが眠っていると書かれていた。その碑銘板を建てたのは妻のドロシーだとも書いてあった。今まで本の中でしか出会わなかったブラウンとその妻が急に身近に感じられた。約3百年前に現実に生きて、付近を歩いていたのだと今更ながら思った。

教会を出ると、先ほど教えられた銅像を見に行くことにした。ヘイ・ヒル (Hay Hill) と呼ばれる広場にそれは立っていた。周りは様々な店が並ぶいわば繁華街である。銅像は台座を入れて4メートルくらいはかなり大きなもので、壺のかけらを手にしたブラウンが椅子に座り、瞑想に耽っている姿であった。これを見ると、ブラウンの著作『壺葬論』(Hydriotaphia, 1658)を思い出すにはおれない。台座には銅像が1905年に立てられたと書いてある。それはブラウンの生誕3百年の年である。この時にロンドンやノリッジで各種の催しが行なわれたことは知っていたが、銅像のことは全然知らなかった。その前で写真を撮ってもらおうと、いかにも観光客らしいことを考えた私は、銅像のそばで遊



ブラウンの銅像

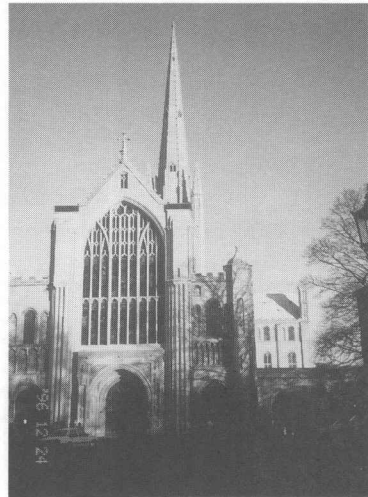
んでいる3人の10歳くらいの少女の一人に声をかけた。彼女は快く引き受けてくれたので、無事記念写真におさまることができた。

その後有名な大聖堂を見に行こうと思い、マーケット・プレイスからタクシーに乗った。数分で大聖堂に着く。運転手にチップも含めて料金を払うと、彼は“Merry Christmas and a Happy New Year!”と言って去って行った。この言葉は、この時期に買い物をしたり、タクシーに乗ったりすると決まって言われるものである。

大聖堂は12世紀に建てられたノルマン様式の見事なもので、これまでに何度か火災に遭い、



ブラウンの銅像と筆者



ノリッジ大聖堂

17世紀の内乱や第二次世界大戦で被害を受けながらも、その都度修復され、美しい姿を今に伝えている。大聖堂は、俗な言い方をすれば、ノリッジの目玉、観光スポットなので、寒い季節にもかかわらず、多くの観光客が訪れていた。

『日記』で名高いジョン・イーヴリン (John Evelyn, 1620-1706) が、1671年にノリッジを訪れたときも、ブラウンはイーヴリンを案内してこの大聖堂に来ている。イーヴリンはブラウンの家に行ったときのことを日記に書き残していて、それには、ブラウンの家は「全体が楽園であり、珍品の飾り戸棚であった。その最上のコレクション、特に貨幣や書物、自然界の事物の戸棚を見ると、昨夜のごたごたの後の私の気分は非常によくなった。」と書かれている。ブラウンは大聖堂以外にもイーヴリンを案内してノリッジのあちこちに行っており、イーヴリンはノリッジの通りの清潔さや建物の立派さに感心している。

大聖堂は高い尖塔を持っている。内部は広々として、窓にはめ込まれたステンドグラスが美しい。柱や壁には彫刻が入念に施されている。歴史の本を見ると、よく教会の建設に数十年、

長ければ数百年もかかったと書いてあったりするが、これほどの規模のものを建てるにはそれも無理からぬところだろうと思う。

大聖堂は観光スポットだけあって、ギフトショップも充実しており、いろいろ興味深いものが売られていた。ミニチュアの大聖堂もあって、思わず買いかけたが、壊れそうなのでやめた。

大聖堂を出ると、目の前に古書店があったが閉まっていたので入れなかった。前々日に行ったウィンチェスターでは古書店を二軒見つけて、掘り出し物を手に入れられたので、その時も一瞬期待したのだが。

そこで古書店は諦めてマーケット・プレイスに行くことにした。中世の面影が残っているエルム・ヒル (Elm Hill) 通りを歩く。通りの両側には骨董や工芸品を売る店が並んでいたが、古書店と同じくクリスマス休暇のためほとんど全部閉まっていたのは残念であった。しかし丸い石が敷き詰められた通りは歩いているだけでも十分楽しめた。

前述したようにマーケット・プレイスはギルド・ホールとセント・ピーター・マンクロフト教会の中間にある。文字通りそこは何十というテントが立ち並ぶ市場で、大勢の人でごった返していた。数百年も前からここでは同じように様々な物が売られていた。ざっと見て回ると、各店には衣類、装身具、絵画、野菜、果物、中古レコードなどが雑然としかも大量に並んでいる。そこかしこで店員と客とのやり取りが聞こえる。ハンバーガーを売る店からはおいしそうなおいが漂ってくる。店と店との間の通路は幅1メートルほどしかない。雑多な店の中で最も目に付くのは服を売る店であった。ノリッジは今でも毛織物製品を得意にしていることがよく判った。一時間ほどぶらぶらしていたが結局そこでは何も買わなかった。

その後、古書店の代わりというわけではないが、Waterstone's という新刊書店に入った。この書店はロンドンにもあったからチェーン店なのだろう。現代の小説家・批評家ピーター・アクロイドの新作 *Milton in America* には心惹かれたが、荷物が重くなるので買わなかった。新刊書はインターネットだと為替レートで買える（送料は多少かかるが）。店の二階に上がるとまず目に付くのが伝記コーナーである。イギリス人の伝記好きはつとに有名だが、実際に壁一面に並んだ伝記を見ると改めて思い知らされる。日本では全然知られていない人物の分厚い伝記がいくらかでもある。棚には Morton H. Cohen によるルイス・キャロルの最新の伝記があったので、これは買うことにした。ルイス・キャロルには以前から興味があって、学部の卒論はキャロルで書こうと思ったくらいである（結局別の作家にしたが）。その本を買って店を出ると外はもう暗くなりかけていた。冬のイギリスは午後四時を過ぎるとすず暗くなってくる。あまり暗くなってからロンドンに帰るのも気が進まないで、駅の方に向かった。

来たときと同様、プリンス・オブ・ウェールズ・ロードを歩く。途中にケンタッキー・フライドチキンの店があって、店の前の道には何台か車が止まっていた。そう言えば今日はクリスマス・イヴだったと思い出す。ノリッジ駅に着いたのは午後四時半、切符は来る時に日帰り往復乗車券を買っておいたので、ぼんやりとベンチに座ってロンドン行きの列車が来るのを待つ。やがて列車が到着した。車内の清掃が済んでから車両に乗り込む。やはりあまり乗客はいない。列車は五時五分に駅を出発した。ロンドンには一時間五十分ほどで着くことになっている。車掌が検札に来る。行きと同じく黒人だった（もちろん別人であったが）。この時は簡単に

“Ticket, please.” とだけ言われた。

途中駅のコルチェスターで二人連れの乗客が乗ってきた。彼らは日本人で大阪弁を喋っていた。曰く「この荷物、むっちゃ重いやんけー」「ほんまかー」という調子である。思わず振り返りかけたが、我慢した。それはイギリスに来てから初めて耳にする日本語であった。

午後七時前に列車はリヴァプール・ストリート駅に着いた。先ほどの二人の日本人の後から列車を降りた。彼らは彼らの他にも日本人が乗っていたことに気がついていなかった。二人は私の前を歩いていたので、見るとはなしに見ると、茶髪をした学生風の人たちであった。「むっちゃ重いやんけー」と言っていた荷物のトランクは確かに重そうで、「割れ物注意」というステッカーが貼ってあったのがおかしかった。一体何が入っていたのだろうか。外はもう真っ暗で、道がよくわからなかったが、セント・ポール大聖堂を目印に西に向かう。やがて美しくライトアップされた大聖堂が見えてきた。すると車が行き交う道の真ん中に出て大聖堂の写真を撮っている人がいた。確かにきれいなので私も真似をして撮った。さすがに道の真ん中には出なかったが。

大聖堂を後にしてフリート・ストリートをさらに西に向かうと、ストランド・ストリートになる。そこに私の宿泊しているホテルがある。

いったんホテルに戻って荷物を置いてから近くのレストランに食事に出かけた。結構空腹だったので、レストランではステーキを注文した。隣の席にはフランス語で会話をしている中年の夫婦が座っていた。店内にはBGMが流れている。曲は知っているのだが、曲名がどうしても思い出せない。気になってしばらく考えたがやはり曲名は出てこない。半ば諦めかけた時、絶妙のタイミングで隣の席の夫の方が“E.T.”と

言っているのが耳に入った。私はそれを聞いて、心の中でそうさそうさ、映画の E.T. のテーマ音楽だったと思い、彼に感謝した。あまりに嬉

しかったので思わず、“God bless you.” と言いかけた、ということはない。